

## M45a ALPACA 実験 10: 太陽からのコロナ質量放出に伴う ALPAQUITA アレイで観測される宇宙線頻度変化の測定限界の評価

M. Anzorena (東大宇宙線研), D. Blanco (サン・アンドレス大), E. de la Fuente (グアダラハラ大), 藤田慧太郎 (東大宇宙線研), R. Garcia (東大宇宙線研), 後藤佳歩 (中部大工), 林優希 (信州大理工), 日比野欣也 (神奈川大工), 堀田直己 (宇都宮大), 今和泉銀河 (東大宇宙線研), A. Jimenez-Meza (グアダラハラ大), 片寄祐作 (横浜国大工), 加藤千尋 (信州大理), 加藤勢 (東大宇宙線研), 川島輝能 (東大宇宙線研), 川田和正 (東大宇宙線研), 小井辰巳 (中部大理工), 小島浩司 (中部大天文台), 槇島拓音 (横浜国大工), 増田吉起 (信州大理), 松橋祥 (横浜国大工), 松本瑞生 (信州大理), R. Mayta (サン・アンドレス大), P. Miranda (サン・アンドレス大), 水野敦之 (東大宇宙線研), 宗像一起 (信州大理), 中村佳昭 (東大宇宙線研), C. Nina (サン・アンドレス大), 西澤正己 (国立情報学研), 野口遊瑚 (横浜国大工), 荻尾彰一 (東大宇宙線研), 大西宗博 (東大宇宙線研), 奥川創介 (横浜国大工), 大嶋晃敏 (中部大工, 中部大理工), M. Raljevic (サン・アンドレス大), H. Rivera (サン・アンドレス大), 齋藤敏治 (都立産業技術高専), 埴隆志 (東大宇宙線研), 佐古崇志 (長野工科短大情エ), J. Salinas (サン・アンドレス大), 柴崎季哉 (日本大生産工), 柴田祥一 (中部大天文台), 塩見昌司 (日本大生産工), M. Subieta (サン・アンドレス大), 杉本布達 (東大宇宙線研), 田島典夫 (理研), 鷹野和紀子 (神奈川大工), 瀧田正人 (東大宇宙線研), 多米田裕一郎 (大阪電通大工), 田中公一 (広島市大情), R. Ticona (サン・アンドレス大), I. Toledano-Juarez (グアダラハラ大), 土屋晴文 (原子力機構), 常定芳基 (大阪公大理, 大阪公大南部研), 有働慈治 (神奈川大工), 碓井玲 (横浜国大工), R. I. Winkelmann (サン・アンドレス大), 山岸元輝 (横浜国大工), 山崎勝也 (中部大理工), 横江誼衡 (東大宇宙線研) 他 The ALPACA Collaboration

11 年周期の太陽活動は 2024 年に太陽周期 25 の極大期に近づいており、地球に向かう大規模なコロナ質量放出 (CME) が多数発生している。ボリビアのアンデス高原 (標高 4,740 m) に設置された宇宙線観測装置 ALPAQUITA アレイ (1 m<sup>2</sup> のプラスチックシンチレーション検出器 97 台を 15m 間隔に総面積約 18,000 m<sup>2</sup> に配置) は、この CME に起因する宇宙線強度の変化を高い統計量で検出することが可能である。本講演では、強度変化の測定限界を支配する観測装置の系統誤差の評価を試みる。